

早稲田ヨットクラブ

# 会報

第12号

昭和57年8月 発行  
 発行所 事務局 早稲田  
 編集 広津 石田 晋也  
 松島 弘行  
 会費振込先 日本橋支店  
 第一勧業銀行 四四五七二九  
 普通預金  
 口座番号 ワセダヨットクラブ 杉山博保

## 小島会長(早風会)に感謝状

— 功労者として・学外では初めて —

恒例となっている各運動部の五十六年度・表彰式は五月十二日、大隈講堂で盛大におこなわれました。今回学校側ではヨット部が多大のご好意をいただいている小島孝徳氏をとお招きして、清水司総長が丁寧な挨拶と共に、ヨット部の永年のご支援に対する感謝をこめ、感謝状と記念品を小島氏に贈られました。今回は早大創立百周年の記念の年でもあることから、初めての学外の功労者と



して、小島氏が表彰されたのであります。さらにヨット部に対して窪田登体台局長から「団体奨励賞(関東インカレ)」と個人名賞賞(個達の二名)がそれぞれ贈呈されました。

当日の参加者は小島氏、矢頭部長、小沢会長、堀江副会長、安藤、浜田OB、加藤監督の諸氏と、部員全員でした。

## 関東インカレに優勝して

監督 加藤 文生

昭和四十一年森主将率いるチームから数えて十六年、全く長かった、かつての学生の雄早稲田もようやくトンネルから抜け出した感じがある。この間四十四年には北島主将のもと、全日本優勝の成果こそあれ関東では優勝目前にして、何回となく涙を流してきた。

今年のチームは渡辺・黒田(浩)と二人の主将を置き多少なりとも変則的な面があったにもかかわらずそのチームワークの良さは近年にない物があった。ご承知の通り各新聞紙上ににぎわした



専門学校の問題、その当事者の一人である渡辺主将の苦悩は言葉で言い表せないものがあつた筈だ。

部員は、試合に出場出来ない渡辺・黒田(佳)の両名を男にしなければと。これに答えるように両名も部の縁の下の力持ちとして、有る時にはレスキュー要員、そして食事当番等……。少ない部員一同が協力し合つて良くぞここ迄頑張つて呉れたと監督として感無量の気になります。

近年高校ヨットが盛んになるにつけ関

東の大学の中にも優秀なヨットマンを多数集め活躍しているチームも少く有りません。早稲田としてはこれらのチームに勝つには何うしたら良いものか上級生の部員と良く話し合いをしたものです。

一つの結論は、素人の集りである早稲田がより強くなるには、従来のやり方である誰もが上期になると舵を持つんだと言ふ事をなくす事でした。人間には向き不向きが有るように、部員にもスキッパー向、そしてクルー向きがある事です。

これを率先遂行したのが56年卒の地曳、中島、川ト、河瀬であり本年卒業の長瀬芝崎です。彼等が自分を捨て後輩を育てるんだと言ふ意気込は自然に部員に伝わり今日この優勝と言ふ結果に結びついたと確信しております。随分低抗がありましたが、入部した時からテラーを持って試合に出る事が私自信もそうであつたやうに、彼等の夢でもあるからですその夢を捨て後輩達に少しでもスキッパーの経験をつませるんだと四年間クルーとして下級生を指導してくれた情熱にあらためて敬意を表します。

部員も今日の勝利はこれらの素晴らしい仲間達、そして熱心に指導に当つた小松一チ始め諸先輩の物、心になつた援助のお蔭と肝に銘じ全日本に向け練習に励んでくれるものと確信します。

六月五日、六日に琵琶湖で行われました同志社定期戦は微風の中級級、S級共勝ちました、これで二連勝です、琵琶湖に遠征して勝つたのは始めてではないでしょうか?全日本も同じ琵琶湖、最先のよい勝利です。

### 木曜日より (例会報告)

6月17日(木) 永楽クラブ 理事会  
(出席者) 久留島 横田 千葉 浜田  
杉山 舟岡 加藤文 木村光 松島 石  
合 中島健 黒田(学生) 十二名

#### ①全日本インカレ

8月27日(金)彦根で開催 早稲田は四七〇、スナイプの各二艇が出場  
レスキューボート(紺碧III)はヤンマーのご好意にて無料で運搬される。  
宿泊先は学生・彦根総合運動場内スポーツ会館、〇七四九(二三) 四九一一  
8月16日(月)より宿泊

#### ②同志社定期戦

6月5日、6日琵琶湖で行なわれ、四七〇、スナイプ共優勝。

③寄附金 四七〇級ワールド遠征の小松コーイチに三万円。関東学生ヨット連盟会長―伊坂市助先生(関東学院)の叙勲祝いとして一万円。

#### 7月15日(木) 永楽クラブ 理事会

(出席者) 安藤 千葉 浜田 杉山  
舟岡 加藤文 石田 松島 杉山孝 大  
以上十名参加。

#### ①全日本インカレ関係

OB宿泊所・双葉荘(別記)については米田(晴)理事が熱心な調査の上決定、現在の宿泊予定者は8月26日舟岡、8月28日(土)杉山博 石田 松島 杉山孝 太  
8月29日(日)安藤 千葉 他に関西OB。  
OB諸兄多数の応援参加を希望します  
学生が合宿中、食事の世話については

松下興産・関根OBより援助をしていただけるとの事です。  
レスキューボートは8月19日に運搬、8月21、22日の両日OBサーブिस(雄琴港入港も可? オフレコ)で琵琶湖周航。  
インカレ参加への補助金  
レース艇の運搬(八隻)と学生の遠征費で約百八十万円が必要であり、その費用捻出の為

(イ) 学生のアルバイト(大丸東京)  
(ロ) 奉賛帳による寄附依頼(学生が関東在任のOBにお願い中)  
(ハ) ヨットクラブよりの援助  
などでやりくりする積りである。

②年会費及び寄附金の振込状況  
7月14日現在の調査結果は後記の通りで会費は七八名、寄附は四九名、合計金額は一、二九九、〇〇〇円である。但しレスキュー委員会への直接払込、奉賛帳分は含みません。又、預金残高は七〇万円弱である。

③会費・寄附金の協力者に対する礼状及び記念品の贈呈  
銀行振込済の各会員に対しては浜田理事より礼状を発送しているが、奉賛帳、レスキュー等の寄附協力者に対しても失礼の無いよう、後日礼状を出すこと。  
その他、ネクタイピン・ブローチ・カフボタン・ペンダント・ブレザー用ボタン等早稲田のオリジナル商品を作り、協力者への贈呈や収入源とすることを計画。浜田理事を通じ高橋OB(16)に見積りをお願いすること。

(連絡事項)  
①7月15日(木) 大阪早稲田クラブで関西OBの総会が開かれ、中塚副会長

米田(晴)理事等十名が出席しました。  
②四七〇級ワールドの結果は、小松・芝崎組が総合六位に入賞。

#### ◎57年度OB会費納入者(7/14現在)

- ⑫森繁⑬松山⑭山田 増井 新名⑮植松 田原 永元⑯堀 堀江⑰隈部⑱金子
- ⑲坪田⑳久保田 清水 横田 木村 久留島㉑木本 佐伯㉒円谷 大津㉓石川
- 安藤 金沢 米田晴 ⑳千葉 遊佐 松本 ⑲杉山 舟岡 安井 伊藤 口色
- 天神 中田 ⑳清水 加藤㉑岡村 関根
- ⑳山田 大野㉑吉田 土肥 橋本㉒小沢
- 角田 石田 伊藤㉑山崎 木村㉒斎藤
- 木内 山中 大 松島㉑滝 長沢 頼
- 石井 斎藤 小坂㉑冬幸 尾本㉒北島
- 大島 斑目㉑三枝 早川㉒種田㉓藤井
- 近岡㉑大島㉒川瀬㉓斉田

#### ◎二寄附をいただいた方々

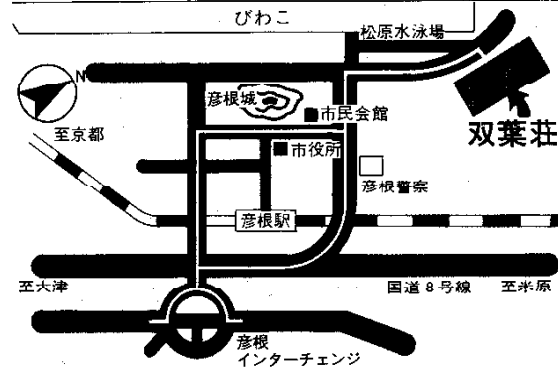
- ⑫森繁⑬植松 田原 永元⑯堀江⑰隈部⑱坪田⑲久留島 木村 横田 清水
- ㉑木本 佐伯㉒円谷 大津㉓石川 金沢
- 米田晴 安藤㉑千葉 遊佐 松本㉒舟岡
- 安井 伊藤 杉山 日色㉑天神 中田
- ⑳加藤㉑関根㉒山田㉓石田 角田 伊藤
- ㉑木村 山崎㉒木内 斎藤 山中 大
- 松島㉑長沢 頼 小坂㉒冬幸㉓斑目 大
- 島㉑早川 近岡

#### ◎57年度会費と二寄附のお願い

全日本遠征とレスキューボート購入のため、大変費用が掛っております。未納のOBの皆様には、何卒会費一万円と何分のご寄附をお寄せいただくたくお願いいたします。

### 全日本学生 選手権・日程

- ◎レース海面 琵琶湖 彦根沖
- ◎日時 八月二五日 開会式
- 八月二六日 個選
- 八月二七日 決勝戦
- ← 八月三一日 (S級)
- ◎学生宿泊所 彦根スポーツ会館 (S470級)
- ◎OB宿泊所 双葉荘 彦根市松原町
- ◎網代口 〇七四九(二三) 四九一一
- ◎交通 新幹線米原駅又は彦根インターより車で七分
- ◎費用 二食付 一泊八〇〇〇円



### 全日本インカレに向けて 主将 渡辺 輝雄

昭和五七年五月四日、関東学生ヨット選手権大会に於て、私たち早大ヨット部は名誉ある優勝旗と共に、全日本学生ヨット選手権大会の切符を手にする事が出来ました。

五六年秋から新メンバーを組み(当時一五名)三戸浜合宿を中心に、約五〇日間ほどの乗艇練習を行ない葉山へ廻航、その後六六戦まで半日しか乗艇出来ず、いろいろ不安(私たちの三戸浜での合宿生活がどの程度のレベルなのか。艇のチューニングには問題はないか。他校けとの程度のスピードを持っているのか)と敵意を抱きもって、四月一〇日の六六戦・第一レースに臨みました。

四七〇級、スナイプ級、共に内容は濃く出来上りは上々、結果は両クラスで一位、総合優勝でした。

部員一人一人にとって学生界チームレースとしての公式戦第一戦がこのような好結果であったことは、自分の行なったレースに対して、誇りとまではいきませんが「何か」を吸収できたのではないかと思います。

二週間後、関東インカレが初まり早大ヨット部は予戦を両クラスともトップで通過、決勝へと進みました。

私たちにとって「決勝」とは監督さんの言葉にもある様に、まさに「区切りの出発点」でもありました。六人戦の結果が何だ、レースはまさにこれから始まるのだ、という気持ちで部員一人一人にあ

りました。決勝戦は合計三レースしか行なわれませんでした。四七〇級優勝、スナイプ級四位で、総合優勝という結果を納めることが出来ました。

関東インカレにおける勝因は①OB諸氏によるレスキュー購入により、以前にも増して内容の濃い海上練習が出来た。

②昨秋以来、天候に恵まれ約五〇日のうち、乗艇不可能な日が二日しかなかった。

③少人数ではあったが、チームプレー(団結力)が素晴らしかった。などがあげられます。まだこの他にも数限りない勝因があります。

私たちは今後「原点ゼロの気持」を軸に、全日本に向けて合宿生活を頑張ります。全日本インカレ開催地が風の無い琵琶湖だからなどという理由で負けたくありません。最高のコンディションで、最高のレース内容で勝つことを心に、部員はシートをティラーを握っています。「原点ゼロの気持ち」になって。

### ヨット部名誉部長

### 水田義雄先生

二月二十六日早朝、水田先生が亡くなられました。

水田先生は戦後長い間ヨット部の部長として優しく学生を見守られておられました。法学部(英米法)教授を退かれ、ご自宅で静養されておられました。行年七十五歳。OB、学生一同、心から先生のご冥福をお祈り致します。

## 早大ヨット部の戦中 戦後復興期の記録

その1

22年卒 久留島三記男

横田 豊

間もなく創部五〇年を迎えようとしていますが、その長い部の歴史の中で、あの太平洋戦争の影響は、今日の平和の時代には全く考えられないような幾多のかけを落しました。

創部から一〇年、ヨット界に君臨し、黄金時代を謳歌していたわが早大ヨット部も、日増しに激しくなる戦争、そして終戦――。全てが廃墟と化した中であつて言うに言われぬ犠牲と試練を強いられたのでした。

この間の一つ／＼は当時を知るO・Bの方々から、それぞれに言い伝えられては来たと思いますが、あるいは、今日迄殆んど知られていないようなことがあるかとも思います。

恰度、戦中に入學し、戦後卒業。その間ヨット部に在籍して、これらを身を以つて経験した者として、「早大ヨット部の戦中及び戦後復興期の記録」を部史に加えて置きたいと思ひ、ここに筆をとりました。

まず、その間の「経過と主要な事柄」を列記した上、そのいくつかについて紹介いたします。尚、四〇年近い歳月が経っており、記

憶ちがいの点もあるかと思ひます。それについて、より正しく記憶していただける方は修正加筆して下さい。

### 「経過と主要な事柄」

#### 一 開戦から終戦まで

昭和十六年一月

太平洋戦争はつ発

昭和十七年 四月

我々、早大入學 ヨット部入部

昭和十七年 七月

戦中(終戦前)に於ける最後の本格的な、夏季フレッシュマン合宿

於 安房勝山

昭和十八年 五月八、九日

戦中最後の第九回WKヨットレース

於 横浜

昭和十八年 七月

戦中最後の夏季フレッシュマン合宿

於 横浜

昭和十八年十一月

学徒出陣により、ヨット部員の上級生、殆んど軍隊へ

昭和十九年

残留部員で横浜及び品川沖で練習、

レースは一切なし

新交響樂團  
特別演奏會



1月20日 午後7・30開演  
於 日比谷公會堂

主催 早稲田O.B.ヨット倶楽部

御 扶 撈

皇紀二千六百年、輝かしい戦績の上に多量にして、  
光輝ある新年が訪れて参りました。

就復國民の地位向上が益々叫ばれて居る時、我が  
早大のヨット倶楽部が創立せられ、幸ひ新交響樂  
團の御賛同を得まして、ここに創立記念音樂會を催  
しました處、新しく多數の貴族の御來場を得ました  
事は我々の最も喜びとする處でございます。これか  
ら必ず貴族の御期待に副ふ様向一層の努力を固  
心に誓つて居ります。

終りに我が早大のヨット倶楽部の爲に今年初の御  
後援をお願い致し、併せて御挨拶の爲に、併せて  
御禮申上します。

簡単でございますが一言御挨拶に代へます。

お誘いの爲、欠禮の點が多いかと存じますが  
何卒御容赦下さいませ御禮申上します。

昭和十五年一月二十日

部 員 一 同

昭和二〇年 前半  
戦火、内地にも及び、練習は不能、  
レースは一切なし所有艇、機装類を

整備し格納 於 横浜  
昭和二〇年 八月  
終戦

戦後復興期

昭和二〇年九月、十月

所有艇、米軍により接收

入船場

私の入隊していか処は、千葉県の  
我孫子であったので、終戦により除  
隊して目黒の自宅へ戻れたのは八月  
十五日から間もない、八月末の頃で  
あった。

戦争終結、米軍の日本進駐という  
混乱の中、日本人皆が敗戦のショッ  
クに呆然自失している最中であつた  
が、母校早大への復学手続きととも  
に、一番気になっていた横浜のヨッ  
トハーバーに九月早々、足を向けた  
のである。

貯木場バス停から岡本造船所、ヨ  
ットハーバーへ行くと、岸壁から見  
る横浜港の海は、つい一ヶ月程前迄  
空襲と機銃掃射の激しかった海とは  
思えない、昔と変わらぬ平和な景色  
であった。

ハーバー横にある機装庫に入り、  
セイル、シートロープ類、マスト、  
ブーム、ラダー、ヤンターボード等  
の機装類を確かめ、更に岡本造船所  
横に格納してあつた一二呎デインギ  
ー数艇(七、八艇)の無事な姿を確  
認し、今後起こり得る状況の予測だ  
につかぬまま取り敢えず帰路につい  
たのである。

そして、愛する艇ならびに貴重な  
機装類の安全を図るにはやはり身近

な処に保管すること、それには母校  
の部屋前(現在の安倍球場の向かい  
側、相撲道場の傍の細長い木造の小  
舎が部室であつた)の空地が最も良  
策と考えたが、当時のこととて、こ  
こに移送するトラックの手配をどう  
したら良いかと迷いつつ、数日後再  
び、私は横浜に向かつた。

するとどうだろう。岡本造船所か  
らヨットハーバーに至る迄の道(野  
原)には、既に鉄線の柵が設けられ  
そこには武装した米軍兵十が行く手  
をさげぎっていた。

もはや、機装庫には行くことが出  
来ない。幸い艇の保管場所は柵外の  
岡本造船所横であつたが、岡本のお  
じさんの話によると、周辺のヨット  
を米軍兵さんがとんどん勝手に持ち  
去つて居るとの事である。このままだ  
とすべてのヨットがなくなるだろう  
という。

岡本さんと相談した対策は、船底  
に穴を開け使用出来ないようにして  
その上で次の対策を考へるといふこ  
とだった。

二人で一二呎デインギーにかぶせ  
てあつた艇を取り払い、一艇づつそ  
の船底にドリルで穴を開けていった。  
全く無念の気持であつた。

しかしながら、その後やはり、こ  
れらの艇はすべて米軍により持ち去  
られてしまった。

横浜ヨットハーバーにおける全ての  
ヨットはその機装を含め、かくして  
姿を消したのである。

昭和二〇年一〇月、我々関東のヨ  
ットマン達の復興への努力が始まる。

(以下次号に続く)